**降誕節第10主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　2025年3月2日**

**「復活の希望に生きる」**

**詩編119編105～107節**

**119:105 あなたの御言葉は、わたしの道の光／わたしの歩みを照らす灯。**

**119:106 わたしは誓ったことを果たします。あなたの正しい裁きを守ります。**

**119:107 わたしは甚だしく卑しめられています。主よ、御言葉のとおり／命を得させてください。**

**使徒言行録26章1～11節**

**26:1 アグリッパはパウロに、「お前は自分のことを話してよい」と言った。そこで、パウロは手を差し伸べて弁明した。**

**26:2 「アグリッパ王よ、私がユダヤ人たちに訴えられていることすべてについて、今日、王の前で弁明させていただけるのは幸いであると思います。**

**26:3 王は、ユダヤ人の慣習も論争点もみなよくご存じだからです。それで、どうか忍耐をもって、私の申すことを聞いてくださるように、お願いいたします。**

**26:4 さて、私の若いころからの生活が、同胞の間であれ、またエルサレムの中であれ、最初のころからどうであったかは、ユダヤ人ならだれでも知っています。**

**26:5 彼らは以前から私を知っているのです。だから、私たちの宗教の中でいちばん厳格な派である、ファリサイ派の一員として私が生活していたことを、彼らは証言しようと思えば、証言できるのです。**

**26:6 今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。**

**26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。**

**26:8 神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。**

**26:9 実は私自身も、あのナザレの人イエスの名に大いに反対すべきだと考えていました。**

**26:10 そして、それをエルサレムで実行に移し、この私が祭司長たちから権限を受けて多くの聖なる者たちを牢に入れ、彼らが死刑になるときは、賛成の意思表示をしたのです。**

**26:11 また、至るところの会堂で、しばしば彼らを罰してイエスを冒涜するように強制し、彼らに対して激しく怒り狂い、外国の町にまでも迫害の手を伸ばしたのです。」**



**今、教会では新年度に向けた準備を進めています。3月30日が教会総会ですので、祈りつつ準備に取り組んでいるところです。その中で私は今年度の教会の歩みを振り返り、神様が諏訪教会を導いて下さっていることを改めて思いました。**

**3月31日のイースターから今年度の歩みが始まりました。まさにその日にN姉が天に召されました。召される少し前にお電話で「わたしは何も怖くないの。だってイエス様のもとに行けるのだから」とおっしゃられておられたことが心に残っています。復活の希望に生きる。死で終わりではなく、死の先になお希望がある。その信仰に生かされる喜びを思わされました。**

**それは10月に召されたT兄も同じです。「我はなり、なり、我を信ずる者は死ぬとも生きん。」ご葬儀で読まれた文語訳聖書のこの御言葉はT兄の愛唱聖句であり、ご自宅に掛け軸で飾られています。かつてキリスト教が嫌いであったT兄が神様の不思議な導きで諏訪教会へと導かれてキリスト者として歩む者とされたのです。そして復活の希望に生きる歩みをされたのです。そのお姿は何かパウロと重なるものがあります。**

**私たちはこのお二人を今年度に神様の御元にお送りしました。「主は与え主は取りたもう、主の御名はほむべきかな」この言葉にありますように、神様の御業なのです。**

**秋には墓じまいと教会墓地への納骨ということもありました。T村にお住いの方が自家墓地の墓じまいを考えておられる中で、ふとお父様が50年ほど前に教会でご葬儀をされたことを思い出されて、教会を訪ねて来られました。色々調べたら、お父様だけでなくおじい様もおばあ様も叔父さんも叔母さんもすでに天に召された諏訪教会員であられたのです。墓地からお骨を取り出して墓じまいをされ、教会の墓地に揃って納骨されました。こんな出来事があろうなどと誰がこの時期に想像できたでしょうか。神様の不思議なお導きとしか言いようがないと思います。**

**もちろん他にも色々な出来事がありました。神様は私たち諏訪教会と共に歩んで下さり、私たちの思いをはるかに超えて働いておられることを思うのです。改めてここまでの歩みを守り導いて下さった神様に感謝しています。**

**パウロが総督フェストゥスが開いた裁判の場において弁明の機会が与えられました。自分にとっては非常に不利な裁判であることはパウロは重々承知でしたでしょう。それでも弁明の機会が与えられて語り始めるのです。ユダヤ人であるアグリッパ王を前にして。恐らくパウロの心の中はこれまでの歩みを振り返り、これまでの歩みを守り導いて下さった神様に感謝をし、神様の恵みを一つ一つ数えることもしていたでしょう。イエス様に出会ってイエス様の十字架と復活の福音を語る伝道者へと変えられていくその前と後、かつて闇の中を歩んでいた自分が光の中を歩む者とされている、復活の希望に生きる者とされている、その数えきれないほどの大きな恵みをこれからパウロは語っていくのです。**

**パウロは語ります。かつての私の事を同胞であるユダヤ人なら誰もが知っています。私はユダヤ教の中の最も厳格な派であるファリサイ派の一員として生活をしていました。と、かつては熱心なユダヤ教徒であったことをまず語ります。**

**そして6～7節でこのように語ります。**

**「今、私がここに立って裁判を受けているのは、神が私たちの先祖にお与えになった約束の実現に、望みをかけているからです。**

**私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕え、その約束の実現されることを望んでいます。王よ、私はこの希望を抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。」**

**「神様が私たち、すなわちユダヤ人の先祖にお与えになった約束の実現」にパウロは希望を抱いているためにユダヤ人から訴えられているというのです。でもそれはユダヤ人もその約束の実現に希望を抱いているのです。ユダヤ人もパウロも基本的には同じ約束の実現に希望を抱いているのです。それはユダヤ人の先祖たちに神様が与えてくださった約束です。はるか遠く神の民イスラエルの民に神様が約束して下さったその約束です。それは救い主の到来の約束です。あなたたちに救い主を送る、遠くイスラエルの民に神様が与えてくださったその約束の実現に希望を抱いている、そのためにパウロはユダヤ人から訴えられているというのです。**

**「救い主到来の約束」ユダヤ人たちは救い主はまだ来ていない、神様の約束はまだ実現していないとその時を今か今かと待ち望んでいます。一方パウロは救い主はもう来られた。その救い主こそが神の子イエス・キリストであり、イエス様の十字架と復活によって神様の約束は実現したんだ。さらにはイエス様が再びこの世界に来て下さる。イエス様は死者の復活の初穂となってやがてこの私も復活をするんだ、その復活の希望に生かされているというのです。これはパウロだけではありません、ペトロたち最初の教会の人たち、さらに2000にわたって教会が大切にしている信仰です。イエス・キリストこそが救い主。十字架と復活。教会が私たちが最も大切にしている救いの出来事です。**

**けれどもユダヤ人にとってイエス様はキリスト、救い主ではありません。神を冒涜し、自分が神の子であると自称して大きな罪を犯して十字架につけられて殺された極悪人です。ましてやこの当時、実際にイエス様の十字架をエルサレムにおいて目撃したユダヤ人は大勢いたでしょうから、なおさらあんな犯罪人を救い主と信じるパウロを始めとするキリスト教徒たちは許しがたいのです。だからパウロを裁判で何度も執拗に訴えるのです。**

**救い主は「すでに」来られたのか、「いまだ」来ていないのか。「すでに」と「いまだ」の違いですが、ここにキリスト教とユダヤ教の大きな違いがあるのです。**

**そしてキリスト教信仰にとって最も大切なことをパウロは次の8節で語ります。**

**「神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。」**

**イエス・キリストが死んで甦られて今も生きておられるキリストの復活、イエス・キリストを救い主と信じる私たちもやがて復活するという復活の希望に生きるその恵みをユダヤ人のあなたたちはなぜ信じがたいと考えるのか。死者の復活などありえないとなぜあなたたちは考えるのか。**

**かつてイエス様が十字架の死から甦られた時、その話を女性たちから聞いた弟子たちは女性たちが語る話を「たわ言」だと思って信じませんでした（ルカ24：11）。たわごと、つまり冗談だと思ったということです。「死んだ人が甦るなど、そんなことあるわけないでしょ。悪い冗談はやめてよ」といった具合です。12弟子の一人の疑い深いトマスさんで有名なトマスは他の弟子たちが「私たちは復活されたイエス様を見た」と言っても「あの方の手に釘の跡を見、この指を釘跡に入れてみなければ、また、この手をそのわき腹に入れてみなければ、わたしは決して信じない。」（ヨハネ20：25）と言ってイエス様の復活を信じることができませんでした。**

**それほどまでにイエス様の復活、死者の復活は信じがたいことなのです。時々「あの復活というものがなければキリスト教は信じられるんだけれどな～」という人に出会います。復活は非科学的だ、非現実的だというのでしょう。私がかつて神学生時代に出席していた教会の当時の青年の方で「わたしはキリストの復活は信じない」と胸を張って言っている人がいました。その方は洗礼を受けて教会生活を送っている人なのですが、復活を信じないと豪語するのです。「じゃあ何を信じているんだろう」と当時の私は思いました。今その方はどうされているのかわかりませんが。**

**確かに復活は信じることは難しいとは思います。死んだ人間が甦る、仮死状態の人が息を吹き返して蘇生するなら確かにありえることですが、完全に死んでしまった人間が生き返るというのはやはり非科学的で、非現実的な出来事です。私たち人間の頭でどんなに考えても理解することは難しいことでしょう。**

**かつてのパウロもイエス様の復活の事を信じることができませんでした。それどころか、イエス様が甦られた、イエス様こそが神様が約束して下さった救い主であり、我々の罪を贖うために十字架にかかって死んでくださり3日目に復活されて今も生きておられる、そのことを信じて声高々に主張するキリスト者たちを教会を迫害していたのです。ナザレのイエスが救い主だなんてありえない、死から復活したなどありえない、でっち上げだ、そんな嘘八百を広めるキリスト教徒はけしからんと迫害の手を伸ばしてやっきになっていたことが語られています。**

**そんなパウロが8節でアグリッパ王そしてパウロの弁明を謁見室で見聞きしているベルニケ、千人隊長やカイサリアの町の主だった人々に向かって語る言葉は胸に訴える者があります。それはパウロがこの弁明を聞いている人だけではなく、私たちを含むすべての人に語りかけているからです。いえ、パウロが私たち一人一人に語りかけているのです。**

**「神が死者を復活させてくださるということを、あなたがたはなぜ信じ難いとお考えになるのでしょうか。」**

**パウロは語ります「神が死者を復活させるのだと」神様なのだと。復活は他でもない神の業である、神様がなさる業であると。私たち人間が頭で考えてどうのこうのしてもどうしようもない。復活は神の業である。この神様がなさる業をあなたたちはなぜ信じないのか。私たちの心にパウロが訴えかけているのです。神様がなさるんだ。なぜ神の業を信じないのか。神様が大きな業をなして下さる。なぜ神様に信頼できないんだ。なにか神様が私たちに語りかけておられるように思いました。**

**今私たちは新年度の計画を立て準備を進めています。これはできる。これはできない。いつの間にかできる出来ないが私たちが中心になっていないのかを今日の説教の準備をしていて考えさせられました。復活など人間の頭で考えてもどうやっても不可能なことです。その不可能なことを神様は私たちを愛しておられるから、私たちを救うためだからこそ大きな大きな御業をなして下さったのです。**

**神がなしてくださる。神様が大きな御業をなして下さる。「神様が」なのです。神様が私たちの教会に大きな大きな御業をなしてくださるのです。私たちの思いをはるかに超える神様のお導きによって教会の歩みは進められていくのです。私たちの人生の歩みは進められていくのです。神様に信頼する、そこに私たちの希望があるのです。神様の大きな御業に信頼して生きていくのです。**